

中国・内モンゴルにおける家畜経済と階級構造

—ホボトシャラ旗を事例として—

額日登搭娜

E Ri deng ta na

Summary

Livestock economy of the Inner Mongolia has been changing rapidly. In the process of population growth, the number of livestock also increased and the condition of grazing field deteriorated accordingly. This paper deals with this process of drastic transformation of livestock economy based on my fieldwork conducted in the Obongol Gacha, Hoboto Shara, the Inner Mongolia in 2011. This paper reveals that increasing livestock numbers caused by population growth gave much pressure on grazing fields and resulted in the deterioration of fodder basis. To cope with this situation, the Government started restricting the traditional use of grazing fields and forced out-migration from the highly deteriorated areas. Base on the analysis of my fieldwork, the paper concludes that the Government policies should be modified to allow the sustainable basis for both livestock keepers and grazing fields.

はじめに

内モンゴルにおいて牧畜経済は急速に変化しつつある。長い歴史を持つ遊牧は定住化の方向に変化し、牧草地の利用についても個別化や細分化が進行した。もっとも重要な変化の要因は人口増加であった。内モンゴルでは人口の増加とともに家畜の数も増え、これが草原の環境に大きな負荷を与えた。環境の劣化を防止するために、また劣化した環境を改善するために、これまでにさまざまな環境改善策が実施された。家畜の数を減らすための方策や、休牧政策等の規制が行われた。草原

で伝統的な牧畜経営を行ってきた牧民の一部を対象とした移民政策も実施された。これらの移民は、他の実業を始めざるをえない立場に置かれた。この政策の関連で市・旗などへ実際に移住した牧民の生計はむしろ困難になった例が少なくなかった。

この移民政策も草原の劣化を防止することはできなかった。むしろ、遊牧経営が不可能になったこと自体が草原の生態をさらに悪化させたと捉えることができよう。もちろん、人口の増加による牧畜業の拡大が環境悪化の原因の一つになったかもしれないが、主要な原因はやはり牧地の総面積の減少とその細分化

であると考えられる。牧畜業の増加だけが環境悪化の原因ではない。環境、家畜、移民に関する政府のさまざまな政策の影響が草原環境の劣化に与えた影響もきちんと検証する必要がある。現時点において、草原の牧畜業が遊牧形式に戻るとするのは不可能な話である。さらに、昔のような個人（家族）単位の経営方式も限界に足していると言えよう。従って、牧畜業の新たな経営方式及び経営組織を模索することが必然の課題となる。

家畜数はこの20年間で非常に減少しており、飼わない人も増えているが、モンゴル族の生業構成のなかで家畜飼養はまだたいへん重要である。家畜の飼い方や家畜経済の有様は地域により多様である。筆者は自分の故郷を事例として、家畜経済が変化する有様を一つの類型として明らかにしたい。

筆者の故郷シリングル盟は生態改善の面では中国中心部からもっとも注目されている地域でもある。その理由として、まず、シリングル盟のホロンシャルガ砂地地帯是北京天津などの首都圏からもっとも近い砂漠化が進行している地帯であり、牧畜業を営む少数民族（モンゴル民族）の密度がもっとも高い地帯であることがあげられる。このため、近年、ホボトシャラを含むシリングル盟では相次いで環境や牧畜経営に対する改善案が実施されてきた。例えば、減量養殖という家畜の頭数を減らす政策が実施され、実際に、家畜の頭数が大幅に減少した。この間、家畜所有者の間にも大きな格差がみられた。また、労働力と土地が不足している世帯では所有する家畜数も少なく、貧乏であった。労働力と土地を十分にもつ世帯のなかには、牧畜経営を行いながら他の大きな収入源をもつ裕福な世帯があった。このように、筆者の故郷では家畜経済が変容するなかで、家畜飼養者の間に大きな経済格

差がみられた。それを収入格差の面から階級格差と捉え、家畜経済と階級格差の関わりに焦点を合わせた事例研究として筆者の故郷の特徴を明らかにし、環境保全と牧畜経済発展の双方を両立できる仕組みを探りたい。

第一章 問題関心・調査方法

1.1 問題関心

内モンゴル自治区シリングル盟のホボトシャラ出身で、小さい頃から牧畜と関わってきた筆者は、今の牧畜業の退化と遊牧民が生活に苦しんでいる現状を目の当たりし、その原因を探り、それに関連する要素を分析し、如何にして牧畜業に適したより良い環境を作ることが出来るかに関心を持った。

内モンゴルの牧畜地域において草原退化¹⁾は深刻になりつつある。砂嵐²⁾が頻繁に発生し、イナゴの災害も新たな災難として牧畜民を悩ませている。そして、砂漠化³⁾の拡大も人々の危機感を高めた。これら生態環境の悪化とその結果は単純なものではなかった。それは、長い歴史の流れで形成された結果であった。その原因について、アルハンバトは「論者たちは人為的経済活動（過放牧、過開墾、人口増加、薪と薬材の採集など）を中心的に扱い、そのうち環境悪化を招いた主要な原因は遊牧によるものとし、家畜の頭数を減らし草地を保護しようと呼びかけている。」⁴⁾とまとめている。遊牧を環境悪化の主要な原因だとみる観点は現在でも一般的である。

1.2 調査方法

2011年8月28日～11月6までに調査対象地である内モンゴルのシリングル盟のホボトシャラ旗でアンケート調査を実施した。現地

の人に協力を求め、40世帯に聞き取り調査を行った。具体的には、モンゴル語で作った質問表を利用した。ボイスレコーダーを使用し、モンゴル語と漢語で質問し、メモを取った。回答者の連絡先を記録し、不明なところをメールや電話で確認するようにした。また、三つの世帯については詳しい事例研究を行った。その他、現地の家畜経済の歴史に詳しい人にインタビューし、本論に関連する本や論文を収集した。

1.3 先行研究

近年、内モンゴルの砂漠化や環境問題について関心が高まり、内モンゴルの家畜経済や環境についての研究が多く行われている。それらの研究動向について、検討しておく。まず、資料統計と聞き取り調査により草原の環境変化を調査した研究者がいた。

賽西雅拉図、酒井啓、小泉武栄らは、生産責任制の導入以降、遊牧拠点や飼育家畜頭数の増加に伴って、草原にどのような変化が生じているかを明らかにするために、また、草原の廃棄がどのように進むのかを予測するために、調査を行った。彼らは、アラタントガトガチャにおける1963～2003年の40年間にわたる飼育家畜頭数と種類についてアバガー旗の統計局の統計資料を調べた。また、牧畜を営む権利状況が変化した1983年以降の牧畜経営について、聞き取り調査を行い、遊牧民の定住化に伴う草原群落の地域的变化を明らかにするため、アラタントガトガチャの中に各調査地区を選択して植生調査を行った⁵⁾。

同様の問題関心から、伊藤操子、敖敏、伊藤幹二らは2004年にフフホト市で開催された中国草地学会・国際草地会シンポジウムへ参加し、シンリンゴル草原の視察を行った。さらに、2004年9月からフルンベル草原で実施し

ている草地更新についての試験を通じて、放牧庄、攪乱による植生変化の解明や人工草地の造成・維持における雑草制御体系の確立などの情報に接し、雑草学的アプローチが不可欠なことから、その背景となっている内モンゴル草原及び草原退化の実態や牧畜の現状を紹介し、草原保護に関して考察を行った⁶⁾。さらに、衛星モニタリングとGPS/GISを利用した研究も行われた。川村健介、秋山侃、横田浩巨、安田泰輔らは衛星モニタリングとGPS/GISを利用した大規模かつ持続的な研究を行った。彼らは、中国内モンゴル草原の砂漠化防止研究を紹介し、衛星モニタリングを用い大面積における草量草質の推定を試み、最後にGPS/GISを利用した放牧強度が草量に与える影響の定量手法構築を試みた⁷⁾。

草地研究のなかには、牧民が最近よく副業にする草原観光についての珍しい論文も含まれている。山口有次と齋藤隆夫は自身の研究の目的を「モンゴル高原の広大な草原は、気候変化に過放牧や過開墾など様々な要因が重なり、急速に退化している。草原を利用した遊牧業としての存続が危ない。かわって観光は新たな有望産業として位置づけられ、遊牧民の伝統的な組立移動式テント住宅『ゲル』を用いたモンゴル特有の観光施設“ゲルキャンプ”が急速に増えている。環境保全や景観保全の視点から観光開発を捉え、さらに法的な規制や管理方法について研究する目的で中国内モンゴル自治区シリンドル盟正藍旗を対象に、観光施設開発の実態や環境・景観保全に関する調査を行った⁸⁾と述べている。

第二章 家畜経済と階級構造

家畜経済と階級構造の分析にあたって、4分

位階級の方法をとった。世帯所得に応じて、調査対象の40世帯を10世帯ずつ4つのグループ（階級）に分けた。所得の高い順に、第1位階級、第2位階級、第3位階級、第4位階級に区分した。主に、上位階級（とりわけ第1位階級）と下位階級（とりわけ第4位階級）の労働、土地、家畜資源間の関係の違いに注目して分析を行う。

2.1 世帯員構成

労働力は生産年齢に即して分析した。生産年齢は15～65歳の年齢層である。以降、「労働力」とは「生産年齢」の人数を指す。表2.1に見るように、第1位階級の労働力の人数は36人であり、4つの階級の中で一番多い。第3位と第4位階級が4つの階級の中で一番少ない。上位階級ほど労働力が多いことがわかる。家畜経営では労働力が多いほどその発展につながる。教育を受けた年数は全階級全体では女性は平均で7年、男性も7年であることがわかる。このように、教育を受けた年数については、階級差も男女差も小さい。教育年数の男女差が小さいのは、女性の社会的地位が男性よりも劣っていないことを示す証のひとつと理解できる。また、教育年数の階級差が小さいのは、本業が牧畜業と共通していること、地域に高等教育機関が存在していないことが原因となっている。

婚姻については、再婚した人の人数は4つの階級で第1位階級に一人、第2位階級に一人おり、再婚している人は非常に少ないことがわかる。モンゴル民族は婚姻を大切にし、離婚を良くないとする文化があるからなのであろう。初婚の人の人数が第4位階級から第1位階級まで増加している。独身の大人の人が少ないことがわかる。喪偶とは夫あるいは妻を失ったことを言う。

副職業の有無と副職業従事者の人数の階級差は大きい。階級が高くなるほど副職業の従事者数が多いといえる。とりわけ第1位階級では、収入の多い副職業への従事者が多い。副職業のなかで一番多いのが乳牛の経営を行っている世帯であった。

2.2 土地所有と土地経営

表2.2に見るように、第1位階級の所有面積は4階級の中で最も大きいことがわかる。第1位階級の中には、所有地を持っていない世帯が土地を借りることによって牧畜経営を維持しているケースがある。例えば、トンダレンさんには所有地はないが、借入地の面積は4280haである。なかには5496haを借りた世帯もある。4階級の中で第1位階級の借地面積が一番大きい。土地の経営面積も一番大きい。土地所有面積の広さが家畜経済の規模と密接に繋がっている。次に所有面積大きいのは第2位階級で、一番少ないのは第4階級である。第1位階級の借入面積は合計借入面積の3分の1ほどである。貸出と休閒地はない。

近年は政府の各種の政策によって、飼養できる家畜数は経営面積に対応するように規制されている。牧畜業で利益をあげようとする牧民は土地を借りて土地経営面積を拡大し、家畜をさらに増やす行動をとってきた。調査対象の牧民の間では土地の貸出や休閒が行われておらず、現在のホボトシャラでは土地に対する需要が非常に大きいことが確認できる。

2.3 階級別家畜構成

表2.3に見るように、まずはヤギの頭数では、第1位階級は多いことがわかる。第2位階級、第3位階級、第4位階級の順に減少している。次に牛の頭数もヤギと同じように第1位階級が多く、第2位階級、第3位階級、第4位

階級の順に減少していることがわかる。馬の頭数については、第1位階級だけが数頭所要しているほか、第2位、第3位と第4位階級の中では馬を持っている世帯がない。

羊の頭数については、第1位階級が一番多く、4位階級が最も少ないことがわかる。家畜の中でも羊の頭数が全体的に多いことがわかる。内モンゴルでは羊の肉を鍋、煮物、焼肉などで幅広く消費しており、羊肉のマーケットは非常に大きい。調査地の環境は羊の飼養に適しているので、家畜の中でも、とくに羊の飼養が展開している。

以上の検討から、家畜の頭数については、第1位階級は羊、ヤギ、牛と馬の4種類すべてにおいて全階級の中でもっとも多くの頭数を飼養していることが確認できる。他方、第4位階級の羊、ヤギと牛の頭数が一番少ない。これらの状況から、収入が多い上位階級ほど、家畜の頭数が多く、家畜経営からの収入が重要な収入源となっていることがわかる。

次に、家畜の雌雄の頭数構成と出産頭数について見ると雄と雌の割合に階級差はみられない。出産頭数については、ヤギの出産頭数については、第2位階級のヤギの出産頭数が全階級の中で最も多く、第1位階級がそれに続いて、第4位階級最も少ないことがわかる。牛の出産頭数については、第1位階級がもっとも多くて、第3位と第4位階級が最も少ないことがわかる。牛の所有頭数の格差が出産頭数にも反映されている。馬の出産頭数については、第1位階級は14頭である。第2位、第3位、第4位階級は馬を持っていない。馬を持つ世帯が近年は非常に少なくなっている。羊の出産頭数については、第1位階級、第2位階級、第3位階級、第4位階級の順に減少している。以上のように、出産頭数は階級や家畜種類により異なっている。次に、子畜の販売につい

て、検討する。全般的な傾向としてまず指摘しておきたいのは、近年、土地面積を基準として放牧可能な家畜の頭数について厳しい規則があるため、出産子をほとんど売り尽くしていることである。

ヤギの子畜販売額については、第2位階級が一番多く、次に多いのは第1位階級で、その次は第4位階級で、第3位階級が一番少ないのである。牛の出産子畜販売額については、第1位階級が一番多くて、次に多いのは第2位階級で、第4位階級が一番少ない。第3位階級は子牛の販売はしていない、馬の出産子畜販売は1例のみ報告されている。40世帯中で唯一馬の子畜販売を行った世帯は第1位階級に属し、その販売額は11000元であった。羊の子畜販売額については、第1位階級が一番多くて、第2位階級、第3位階級、第4位階級の順に減少している。

近年、土地面積を基準とした家畜飼養頭数の規制が実施されているために、土地面積を増やさなければ家畜飼養頭数も増やすことができない。上位階級のなかには家畜飼養頭数を増加させるために、借入などを通して経営面積を増加させる世帯もあるが、全階級をみると、家畜飼養頭数の増加には大きな限界がある。そのため、子畜の多くは生後間もなく販売されている。子畜販売は、土地面積基準が導入される以前に比べて、近年活発になったものと考えられる。

2.4 家畜別階級構成

表2.4に見るように、ヤギの頭数については、第1位階級は全階級の中で一番多い。次には第2位階級、その次は第3位階級、第4位階級が一番少ないのである。雄と雌についてはどの階級でも雌の頭数が雄の頭数を大幅に上回っていることが分かる。なぜならば、家

畜の頭数を増やして行くために、雌の家畜をできるだけ残しておいて、雄の家畜を大体販売してしまうからである。

牛の頭数は、第2位階級が一番多くて、第1階級、第3位階級、第4位階級の順に少なくなっている。ヤギと同じく、どの階級でも雄の頭数が雌の頭数を大幅に上回っていることが分かる。近年、牛の頭数がどんどん少なくなっている。馬の頭数については、第1位階級の馬はほとんど雌ということがわかる。第2位、第3位、第4位階級は馬を持っていない。近年、家畜の種類が徐々に少なくなる中で馬を飼育している世帯は最も少なくなっている。馬は高い身分の象徴ともいえるであろう。

羊の頭数については、第1位階級一番多く、次に多いのは、第2位階級で、その次は第3位階級で、第4位階級が一番少ないのである。ほかの家畜と同じく雌の頭数が雄の頭数より多いことがわかる。羊の総頭数が全家畜の種類の中でも頭数が一番多い。家畜による収入の一番大きい割合を占めている。

家畜の種類については、第1位階級は羊、ヤギ、牛と馬の4種類であるのに対して、第2位、第3位、第4位階級は羊、ヤギと牛の3種類で、馬がないことがわかる。馬は以前から交通手段として使われていたが、近年バイクと車に変化し、馬は必要ではなくなった。特に、馬はコストの高い家畜なので、現代では富裕層のみが馬を飼養できる。この意味で、馬は世帯の裕福の特徴にもなっている。

2.5 階級別労働別日

表2.5に見るように、トラクターを利用した労働は主に草を刈り取る時に必要とされる。家族労働の中で重要なのは、「子畜出産」⁹⁾、「ヤギの毛を刈る」¹⁰⁾作業、「羊毛を刈る」¹¹⁾作業、「羊やヤギを洗う」¹²⁾作業、「子畜を放牧す

る」作業、「家畜を販売する」作業、「冬の肉を準備する」¹³⁾作業、「草を刈り取る」¹⁴⁾作業、「家畜に餌(草、飼料)与る」¹⁵⁾作業などである。

全階級の「子畜出産」の労働日と「牧畜に餌(草、飼料)与る」作業が年間100日前後で、そのほかの作業のための労働日が10日前後であることがわかる。子畜を無事に育てるのが牧畜業の発展と直接つながるので、放牧労働の中でも最も重要でありながら難しい仕事である。

近年は多くの放牧世帯が子畜が生まれた時から母親家畜と一緒に放牧し、生乳を取らない。昔は、子畜が生まれたら母畜から生乳を搾って使用するのが一般的だったが、近年は変化し、生乳を搾らなくなり、乳製品は専門店から購入することが多くなった。

雇用労働については、「草を刈り取る」作業のため第2位階級では4日間で1人を雇用していた世帯が1世帯あることがわかる。しかし、このように労働力を雇用することは非常に少ない。「草を刈り取る」作業は年間の各労働の中で重要な作業になる。各牧民たちは互いに助け合いながら、この大量の労働力を必要とする作業に対応している。

以上の検討を通して、全階級が家畜労働の労働パターンと労働日がほぼ同様であると確認できる。調査世帯は同じ地域から選択したため、地勢や飼育環境が類似していることに加え、政府の家畜飼養規制も同様に適用されたこと、また家畜の種類や品種、さらには飼養方法や技術に大きな階級差がないために、家畜関連労働のスタイルにも共通点が多い。

2.6 労働日別階級構造

表2.6に見るように、トラクターを利用した労働については、第1位階級が10前後に対して第2位階級と第3位階級と第4位階級が20日

ぐらいであることがわかる。第2位階級はトラクターを利用した労働を利用してない。第4位階級と第3位階級は同様にトラクター労働を利用した世帯は1世帯しかなかった。

家族労働については、全階級の「子畜出産」の労働日と「牧畜に餌(草、飼料)与る作業が100日前後で、そのほかの「ヤギ毛を刈る」作業、「羊毛を切る」作業、「羊やヤギを洗う」作業、「子畜を放牧する」作業、「家畜を販売する」作業、「冬の肉を準備する」作業、「草を刈り取る」作業、「家畜に餌(草、飼料)与る」作業のための労働日が大体10日前後であることがわかる。

全階級を通じて、家畜労働において、労働力を雇用する世帯が非常に少ないことがわかる。各世帯がお互いに助け合っていることが、現時点での彼らの家畜労働の大きな特徴となっている。これは、牧畜経営の昔ながらの労働スタイルでもあり、モンゴル民族の独特の美德でもあるとえいさるだろう。ただし、このような協力関係がいつまで継続できるかについての見通しは不透明である。

2.7 階級別ヤギの毛と羊毛生産

表2.7に見るように、第1位階級のヤギの毛の販売量と販売金額は第2位階級とほぼ同様で、第3位階級と第4位階級のヤギの毛の販売量と販売額が同様であることがわかる。その差が販売量は10キログラムで、販売額は2000元前後であることがわかる。

羊毛については、第1位階級の販売量と販売額が一番多いことがわかる。販売量と販売額とも第2位階級、第3位階級、第4位階級の順に減少している。第1位階級と第2位階級、第2位階級と第3位階級、第3位階級と第4位階級の販売量の差は同様に100キログラムであり、販売額については2000元ぐらいの差が

あることがわかる。

以上の検討から確認できるのは、ヤギの毛と羊毛の販売量と販売額が全階級の中で第1位階級が一番高く、次に第2位階級で、以降第3位階級、第4位階級と少なくなっている。ヤギの毛が羊毛よりも市場価格が高い。しかし、羊の頭数がどの階級でもヤギより多いので、羊毛も牧畜経営の収入の重要な要素になっているのである。このように、ヤギの毛と羊毛の販売量と販売額は上位階級にとっての有力な収入源となっている。

2.8 羊毛とヤギの毛の階級別構成

表2.8にみるように、ヤギの毛と羊毛の販売量は第1位がほかの階級より10キログラムほど多いのに対して、第2位階級、第3位階級と第4位階級の順に減少しているがその差は大きくないことがわかる。

以上のデータから、ヤギの頭数が全体的に非常に少ないことがわかる。しかし、ヤギの毛の市場価格が羊毛よりも高いので頭数が少なくても収入の中では欠かせない一部分になっているのである。収入が多い階級の販売量と販売額が収入が低い階級ほど、ヤギの毛と羊毛の販売量と販売額が少なくなることがわかる。

特にヤギの毛の販売量は全階級で少ない。近年は土地が世帯ごとに分配されており、各世帯が網で利用可能の草地を包囲したため、ヤギを飼育するのに適していないことが原因し、ヤギの頭数は少なくなってきた。ヤギは網の下から抜け出し、他の世帯の草地に入ったりするため一日中ヤギの放牧をしなければいけないのである。それに対して、羊は比較的に行動範囲が広くないため、放牧しやすい。調査対象地ではヤギの毛による利益は減少傾向にあることがわかる。これも、国の

各政策が牧民の生活スタイル、収入までも左右している一つの結果といえるだろう。もし、昔からの遊牧生活を現在も行っていけば、市場価値の高いヤギを飼う世帯も増え、一方では、ヤギによる牧民の収入も増えていたのではないか。

2.9 階級別家畜販売

表2.9に見るように、家畜の死亡原因¹⁶⁾については、病気が原因になる例が最も多い。岩に挟まれて死亡した¹⁷⁾ケースも少数だがあった。処理方法は、捨てることで、全世帯同様である。贈答の一番多い例は、友達の子供に与えた贈り物によるもので一番多く5頭であった。放牧経営をしているモンゴル民族は羊と牛を贈り物としてもよく使う。さらに豪華な贈り物としては馬とラクダを贈り物にすることもある。最近夏に行われる各地の相撲大会に馬一頭を賞品にすることもある。

また、第2位階級の死亡原因も病気による死亡率が高いことがわかる。ヤギの贈答が一番多いのは、結婚式による贈り物である。第3位階級では友達に贈ることが多い。第4位階級の死亡頭数の病気による死亡が多い。処理方法は同じく捨てることである。家畜の贈答については、贈答目的は友達に贈るプレゼントが多い。販売先については、旗の冷凍倉庫に家畜を販売する世帯が多い。

以上から、全階級の中で第1位階級の家畜販売金額が一番多く、第4位階級の家畜販売額が一番少ないことが分かる。家畜の頭数が少ないと家畜販売の頭数も少なくなることも確認できる。

おわりに

3.1 調査結果

土地の面では、2006年以来土地の個別世帯への配分政策によって草地はますます劣化し、砂漠化しつつある。1987～2005年までは土地をガチャの人々が共同で利用していた。当時オボンゴラガチャは3隊に分別されていた。土地を全ガチャで同様に利用する際には、世帯によって家畜の頭数の不均衡なことが問題になってきた。家畜過放問題を緩和するために、2006年に土地が各世帯に分配された。旗の職人たちは地理位置に対する認識が十分ではないため、様々な問題があり、分配された土地の位置が他人の家の外にあったり、土地の形が細長い形であったりした。その結果、家畜の移動可能なスペースが非常に狭くなり生態環境が破壊された。近年は植物の品質も低下し、栄養のあるヒアガ、アギ等がほとんどなくなり、ウヘラシヨロヘイ、エラマ、リョーリなどの粗大な植物が多くなってきた。

家畜の面では、干害や政府の各種の政策などにより家畜の頭数が少なくなりつつあり、家畜の種類は馬、ラクダ、牛、羊、ヤギの5種類から羊、ヤギ、牛の3種類に変わり、そのうち牛の頭数が大幅に減少したことがはっきりとわかった。

環境の面では、干害が深刻な問題になってきた。1999年の春に大きな砂嵐が起こり、2000年の6月に大干害が襲った。2001年にまた大干害になった。これら干害によって、牛と馬はほぼいなくなった。牛を子畜と一緒に二頭で380円で販売していたケースもあった。それからずっと干害は続いてきたが2007年に再び大干害に襲われ、これが2010年まで続いたのである。2011年は植物の成長が良くて大収穫の年になった。

政策の面では、「生態移民」と「異封転移」の他、「50ム¹⁸⁾当たり羊一頭(羊一頭/50ム)或いは150ム当たり牛一頭(牛一頭/150ム)の

自食家畜の養殖を可とし、その中で、ホランシャラガダガ砂地治理区牧戸は、150ム当たりで牛一頭 (牛一頭/150ム) の養殖を要求する。」¹⁹⁾ などの内容を含めた「饜黄旗草原生態保護における補助奨励メカニズムプロジェクト実施細則 (試行)」¹⁹⁾ が実行されている。

階級差の面では、年収が10万円を超える世帯があるのに対して2万以下の世帯もあった。収入が高い世帯では、他の世帯の土地を大量に借りて家畜経営していることや家畜経営をしながら第二企業を経営していた。収入が低い世帯では牧民の年齢が高いか、あるいは障害を持つ人がいた。今回の40世帯で行った聞き取り調査の結果から、近年は、生態環境と政府の各種の政策によって家畜の頭数が徐々に減少し、家畜の種類がさらに少なくなったことが分かった。2000～2010年までの各規模の干害により草原の環境が悪化した。そのため牧畜民たちが家畜の餌になる草と飼料を大量に購入することによって家畜経営を維持しなければならず大変苦勞したことがわかった。

3.2 考察

牧畜民の中でも第1位階級の世帯はほぼ副業を持っていることがわかる。さまざまな変化が起きている現在の内モンゴルの家畜経済にとっては副職業が今後の課題となってくるであろう。いかに、そのバランスを保持しながら家畜文化を守っていくかがポイントだと考える。

3.3 今後の課題と展望

2012年の今年までの10年の間には中国の経済は急速に発展を続けた。今回の調査を通して内モンゴルのホボトシャラ旗の牧畜地域の経済の成長は明らかではなかったことがわかった。2000年～2010年までに干害が

連続して起り、牧民たちの生活は大変苦しい状況にあった。この間の鉱山開発により草原大きく破壊された。大型トラクターが草原の上を系従規模に走り、大量の草原を砂漠化させた。それが原因で起こった現地の牧民たちの間のトラブルもシリング盟の各旗で多数あった。そこで政府は放牧経営に対して各種の規制を開始した。それらの規制が、放牧経営にどのような影響を与えたのかについては改めて明らかにする必要があると考える。草原資源を守り環境を改善するためには、放牧地域の現状に適合する新たな政策や規則を模索する必要があるだろう。今回はホボトシャラの放牧地域の40世帯を調査した。本来は内モンゴル各地域のもっと広い範囲での調査が望ましいのだが、今回は時間の制約のため調査はホボトシャラ旗でのみ行った。生活の現状、草原環境、政府の各政策を比較し、各地域の変化のパターンを明らかにしてみたいと考えている。

内モンゴルにおける草原の生態環境の悪化の原因として、まず人口の増加があげられる。人口の増加とともに牧畜業が拡大した。牧畜の急増が草原に負荷をかけ、各種の問題を起こした。それに伴い、放牧制度に変化が生じる。人口と家畜の増加は生態環境の悪化の原因だと見られているが本来、遊牧経営は環境に優しい事業である。草地在り分配され、さらに細分化されたことによって牧畜業は動態的経営の利点を失った。牧畜単位の縮小によって、草原への破壊が深刻になり、砂漠化などの各種の問題が発生した。結局、牧畜区での人口を減らし、牧畜の頭数を減らすのが草原環境を守るための最適方法とされ、具体的には「生態移民」や「異封転移」などの政策が実施された。これら政策は結果として草原生態環境の改善には繋がらなかった。なぜなら

ば、牧畜民の移住とともに新しいグループの人々が入り込み、それが環境破壊のさらなる原因にも繋がった。例として、鉱業、旅行業などがあげられる。これら産業の新興によって、当地の旗、市が豊かになったわけではない。むしろ、鉱業は土地を大きく破壊したので、採鉱し開墾された土地の回復には相当の時間がかかるものと思われる。また、巨大なトラクターの草地に与える害も深刻であった。四輪車の痕跡が何年も残留して、そのまま砂漠化に発展したこともあった。

一方、政府の実行している政策で休牧になった牧民が別の地域で牧畜の経営をして草原との直接的繋がりが回復した事例もあった。これらの現実から、これまでの環境改善政策は不十分であることがうかがえる。生態環境問題について、政府の各種の制度が重要な役割を果たすことは間違いない。家畜の頭数を増加させれば環境政策に違反し、少数の家畜を飼育すれば生計が困難となる。これが現在の牧民の直面している政治と経済の二つの圧力である。政府は家畜の質を高め、家畜の市場価格の低迷化に対しての適切な政策が求められる。牧民に対して、草原での牧畜経営を続けることができる有利な条件を提供することは問題解決の鍵になる。牧民の収入を増やすことと生態環境の改善は密接な関係にある。最後に、単に生態環境を改善するには、環境保全と家畜経営の双方を両立させることのできる持続的な仕組みや、それを実現するための適切な政策が求められていることを強調しておきたい。

表 4-1(1) 世帯員構成

第1位	年齢	女	男	計
	0.2	1	0	1
	0.4	0	1	1
	3	0	1	1
	4	1	0	1
	6	1	1	2
	8	2	0	2
	9	0	1	1
	10	0	1	1
	18	1	0	1
	21	1	0	1
	23	1	0	1
	25	2	0	2
	26	1	0	1
	27	0	1	1
	28	1	1	2
	30	1	2	3
	32	1	1	2
	33	0	1	1
	34	1	1	2
	36	0	1	1
	39	2	0	2
	43	0	1	1
	44	0	1	1
	48	1	0	1
	49	1	1	2
	50	0	1	1
	51	2	0	2
	53	1	0	1
	55	1	1	2
	56	0	1	1
	58	1	0	1
	62	0	1	1
	68	1	0	1
	76	0	1	1
	78	1	0	1
合計		26	21	47

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

表4-1(2) 世帯員構成

第2位	年齢	女	男	計
	2	0	1	1
	3	1	0	1
	5	1	1	2
	6	1	0	1
	10	0	1	1
	14	1	0	1
	15	1	0	1
	22	1	0	1
	23	1	1	2
	24	1	0	1
	25	1	0	1
	26	1	1	2
	27	1	0	1
	29	2	1	3
	32	0	1	1
	33	0	1	1
	34	1	0	1
	37	1	1	2
	38	2	2	4
	44	1	0	1
	46	0	1	1
	48	1	1	2
	51	1	0	1
	55	1	1	2
	61	1	0	1
	75	1	1	2
	79	0	1	1
合計		23	16	39

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

表4-1(3) 世帯員構成

第3位	年齢	女	男	計
	2	1	0	1
	6	1	0	1
	7	1	0	1
	12	1	1	2
	14	1	0	1
	18	0	1	1
	19	2	0	2
	22	0	1	1
	23	1	0	1
	26	1	0	1
	29	1	0	1
	30	0	1	1
	35	2	0	2
	36	0	1	1
	38	2	3	5
	39	1	0	1
	40	1	0	1
	41	0	2	2
	42	0	1	1
	43	0	1	1
	44	1	0	1
	46	1	1	2
	63	1	1	2
	64	0	1	1
	66	0	1	1
	72	1	0	1
	75	1	0	1
合計		21	16	37

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

表 4-1(4) 世帯員構成

第4位	年齢	女	男	計
	1	1	0	1
	2	0	1	1
	10	1	0	1
	13	1	1	2
	16	0	1	1
	17	1	0	1
	21	0	1	1
	24	1	0	1
	25	1	1	2
	26	1	0	1
	28	1	0	1
	30	0	1	1
	32	0	1	1
	36	1	0	1
	37	1	0	1
	38	1	1	2
	39	0	1	1
	40	0	2	2
	43	1	0	1
	45	1	1	2
	48	0	1	1
	50	0	1	1
	52	1	1	2
	58	1	0	1
	61	1	0	1
	65	2	0	2
	66	0	1	1
	70	0	1	1
	77	1	0	1
合計		19	17	36

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

表 4-1(5) 世帯員の階級別婚姻と性別

階級	婚姻状況	性別		合計
		女	男	
1	婚姻 再婚	0	1	1
	初婚	13	12	25
	喪偶	3	0	3
	未婚	10	8	18
合計		26	21	47
2	婚姻 初婚	12	11	23
	喪偶	2	1	3
	未婚	9	4	13
	合計		23	16
3	婚姻 初婚	11	11	22
	喪偶	3	1	4
	未婚	7	4	11
	合計		21	16
4	婚姻 再婚	1	0	1
	初婚	8	9	17
	喪偶	3	0	3
	未婚	7	8	15
合計		19	17	36

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

表4-1(6) 世帯員の階級別教育を受けた年数と性別

階級コード		性別		合計
		女	男	
第1位	教育を受けた年数	1	2	3
	11年	3	4	7
	12年	1	0	1
	15年	1	1	2
	1年	1	1	2
	2年	2	1	3
	3年	0	1	1
	4年	1	0	1
	5年	7	3	10
	8年	8	8	16
	年	1	0	1
	合計	26	21	47
第2位	教育を受けた年数	4	2	6
	11年	4	2	6
	15年	4	0	4
	2年	0	1	1
	5年	6	3	9
	8年	5	8	13
	合計	23	16	39
第3位	教育を受けた年数	2	0	2
	10年	0	1	1
	11年	3	3	6
	13年	1	0	1
	14年	0	1	1
	15年	2	1	3
	1年	1	0	1
	5年	6	5	11
	8年	6	5	11
	合計	21	16	37
第4位	教育を受けた年数	1	1	2
	10年	1	0	1
	11年	1	4	5
	15年	2	1	3
	16年	1	0	1
	3年	1	0	1
	5年	8	4	12
	6年	0	1	1
	8年	4	6	10
	合計	19	17	36

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

表4-1(7) 階級別副職業と性別

階級コード		性別		合計
		女	男	
1 副職業	なし	26	14	40
	モンゴル風食堂	0	1	1
	モンゴル服飾工場	0	1	1
	運転手	0	2	2
	出稼ぎ	0	1	1
	畜農有限会社	0	1	1
	乳牛の経営	0	1	1
合計		26	21	47
2 副職業	なし	23	13	36
	歌手	0	1	1
	出稼ぎ	0	2	2
合計		23	16	39
3 副職業	なし	21	13	34
	歌手	0	1	1
	出稼ぎ	0	2	2
合計		21	16	37
4 副職業	なし	19	17	36
合計		19	17	36

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

表4-2 土地所有と土地経営

単位：ha

階級コード		所有面積	借入面積	貸出面積	休閒	経営面積
第1位	平均面積	3,022.60	1,446.80	0.00	0.00	3,450.60
	世帯数	10	10	10	10	10
	合計	30,226	14,468	0	0	34,506
	総合計の%	28.7%	36.0%			30.9%
第2位	平均面積	2,837.60	1,153.40	0.00	0.00	2,975.00
	世帯数	10	10	10	10	10
	合計	28,376	11,534	0	0	29,750
	総合計の%	26.9%	28.7%			26.7%
第3位	平均面積	2,620.40	1,007.60	0.00	0.00	2,667.20
	世帯数	10	10	10	10	10
	合計	26,204	10,076	0	0	26,672
	総合計の%	24.8%	25.0%			23.9%
第4位	平均面積	2,065.40	416.60	0.00	0.00	2,065.40
	世帯数	10	10	10	10	10
	合計	20,654	4,166	0	0	20,654
	総合計の%	19.6%	10.4%			18.5%
合計	平均面積	2,636.50	1,006.10	0.00	0.00	2,789.55
	世帯数	40	40	40	40	40
	合計	105,460	40,244	0	0	111,582
	総合計の%	100.0%	100.0%			100.0%

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

表4-3(1) 階級別家畜構成

単位：元

階級コード	家畜種類		頭数	オス	メス	子畜出産頭数	子畜販売頭数	販売額	合計	
第1位	ヤギ	平均値	39.75	7.86	36.14	31.71	32.17	6,373.75		
		頭数	8	7	7	7	6	8		
		合計	318	55	253	222	193	50,990		
	牛	平均値	8.20	2.43	6.86	4.00	2.83	4,666.00		
		頭数	10	7	7	8	6	5		
		合計	82	17	48	32	17	23,330		
	馬	平均値	11.33	18.00	13.00	7.00	7.00	11,000.00		
		頭数	3	1	1	2	1	1		
		合計	34	18	13	14	7	11,000		
	羊	平均値	140.00	10.80	119.30	106.80	99.44	42,555.00	51,087.00	
		頭数	10	10	10	10	9	10	10	
		合計	1,400	108	1,193	1,068	895	425,550	510,870	
第2位	ヤギ	平均値	37.71	5.00	32.71	35.14	38.67	8,314.29		
		頭数	7	7	7	7	6	7		
		合計	264	35	229	246	232	58,200		
	牛	平均値	10.00	2.20	10.00	3.17	2.67	3,500.00		
		頭数	7	5	5	6	3	1		
		合計	70	11	50	19	8	3,500		
	羊	平均値	123.30	6.60	116.70	94.30	88.50	30,833.00	37,003.00	
		頭数	10	10	10	10	10	10	10	
		合計	1,233	66	1,167	943	885	308,330	370,030	
	第3位	ヤギ	平均値	28.29	5.71	22.86	19.71	18.29	4,455.00	
			頭数	7	7	7	7	7	8	
			合計	198	40	160	138	128	35,640	
牛		平均値	7.88	2.33	6.67	2.14				
		頭数	8	6	6	7				
		合計	63	14	40	15				
馬		平均値	0.00							
		頭数	2							
		合計	0							
羊		平均値	104.50	5.20	98.30	87.90	79.40	26,196.00	29,760.00	
		頭数	10	10	10	10	10	10	10	
		合計	1,045	52	983	879	794	261,960	297,600	
第4位	ヤギ	平均値	22.22	2.00	23.00	23.43	22.00	5,047.78		
		頭数	9	8	8	7	7	9		
		合計	200	16	184	164	154	45,430		
	牛	平均値	6.33	1.50	6.75	3.67	3.00	1,960.00		
		頭数	6	4	4	3	2	1		
		合計	38	6	27	11	6	1,960		
	馬	平均値	0.00							
		頭数	1							
		合計	0							
	羊	平均値	54.00	3.00	51.00	45.60	43.50	18,419.70	22,542.70	
		頭数	10	10	10	10	10	10	10	
		合計	540	30	510	456	435	184,197	225,427	

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

表4-4(1) 家畜別階級構成

単位：元

家畜種類	階級コード		頭数	オス	メス	子畜出産頭数	子畜販売頭数	販売額	合計
ヤギ	第1位	平均値	39.75	7.86	36.14	31.71	32.17	6,373.75	
		頭数	8	7	7	7	6	8	
		合計	318	55	253	222	193	50,990	
	第2位	平均値	37.71	5.00	32.71	35.14	38.67	8,314.29	
		頭数	7	7	7	7	6	7	
		合計	264	35	229	246	232	58,200	
	第3位	平均値	28.29	5.71	22.86	19.71	18.29	4,455.00	
		頭数	7	7	7	7	7	8	
		合計	198	40	160	138	128	35,640	
	第4位	平均値	22.22	2.00	23.00	23.43	22.00	5,047.78	
		頭数	9	8	8	7	7	9	
		合計	200	16	184	164	154	45,430	
牛	第1位	平均値	8.20	2.43	6.86	4.00	2.83	4,666.00	
		頭数	10	7	7	8	6	5	
		合計	82	17	48	32	17	23,330	
	第2位	平均値	10.00	2.20	10.00	3.17	2.67	3,500.00	
		頭数	7	5	5	6	3	1	
		合計	70	11	50	19	8	3,500	
	第3位	平均値	7.88	2.33	6.67	2.14			
		頭数	8	6	6	7			
		合計	63	14	40	15			
	第4位	平均値	6.33	1.50	6.75	3.67	3.00	1,960.00	
		頭数	6	4	4	3	2	1	
		合計	38	6	27	11	6	1,960	
馬	第1位	平均値	11.33	18.00	13.00	7.00	7.00	11,000.00	
		頭数	3	1	1	2	1	1	
		合計	34	18	13	14	7	11,000	
羊	第1位	平均値	140.00	10.80	119.30	106.80	99.44	42,555.00	51,087.00
		頭数	10	10	10	10	9	10	10
		合計	1,400	108	1,193	1,068	895	425,550	510,870
	第2位	平均値	123.30	6.60	116.70	94.30	88.50	30,833.00	37,003.00
		頭数	10	10	10	10	10	10	10
		合計	1,233	66	1,167	943	885	308,330	370,030
	第3位	平均値	104.50	5.20	98.30	87.90	79.40	26,196.00	29,760.00
		頭数	10	10	10	10	10	10	10
		合計	1,045	52	983	879	794	261,960	297,600
	第4位	平均値	54.00	3.00	51.00	45.60	43.50	18,419.70	22,542.70
		頭数	10	10	10	10	10	10	10
		合計	540	30	510	456	435	184,197	225,427

出所：筆者のフィルワーク調査結果（2011年）

注

- 1) 草原退化とは、植生だけでなく土地の劣化を伴う草原態系の変化のことである。
- 2) 砂嵐(すなあらし)は、塵や砂が風により吹き上げられ、上空へ舞い上がる気象現象。砂漠または平野において観察される。
- 3) 砂漠化とは「気候的変動と人間活動を含むさまざまな原因によって起こる乾燥、半乾燥および乾性半湿潤地域における土地の荒廃」と定義されている。
- 4) 阿柔瀚巴図『中国内モンゴルの牧畜における草地利用方式に関する研究』37頁。
- 5) 賽西雅拉図 酒井啓 小泉武栄「中国・内モンゴルのアバガーホシュー草原における飼育家畜の密度と草原荒廃の関係」『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ』2007年、58頁、21～35頁。
- 6) 伊藤操子 敖敏 伊藤幹二「内モンゴル草原の現状と課題」『雑草研究』51(4)、2006年、256～262頁。
- 7) 川村健介 秋山侃 横田浩巨 安田泰輔「草原生態系の保全と持続的利用にむけて—衛星モニタリングとGPS/GIS—」『日本生態学会誌』55(2)、2005年、327～335頁。
- 8) 山口有次 齋藤隆夫「内モンゴル正藍旗の観光施設開発と環境・景観保全に関する調査」『桜美林論考』ビジネスマネジメントレビュー 2、2011年3月、79～94頁。
- 9) 『子畜出産』の期間とは11月～3月である。出産する家畜は主に羊とヤギである。
- 10) 『ヤギ毛を切る』とは、年に一回、夏が暑くなると家畜を涼しくさせる、刈り取った毛を販売し利益を得るための二つの目的で行われている作業である。
- 11) 同上。
- 12) 『羊やヤギを洗う』作業は年に2回行われる。六月と九月である。
- 13) 『冬の肉を準備する』作業とは毎年11月になると牛を殺して、12月～4月までに料理に使う肉を準備しておくことである。大体一日ぐらいかかり、近所の人も助け合い、5～6人で作業を完成する。
- 14) 『草を刈り取る』作業は9月に行われる労働の一つである。手もしくはマシンで草を刈り取って、山にしておく。そのまま少し乾かして、トラクターに乗せ家畜舎の中に入れておく。
- 15) 『牧畜に餌(草、飼料)あげる』作業とは、大体12月～4月までに家畜を健康で冬の寒さを乗り越えさせるため草や飼料で飼育することである。
- 16) 家畜の死亡原因は主に、4種類に分別することができる。①は病気による死亡。②は災害による死亡。③は井戸に落ちることによる死亡。④は狼などの野生動物に食べられることによる死亡。
- 17) 『岩に挟まれて死亡する』今回の調査地域オボンゴラにはホボトシャラで一番高い山がある。その山も家畜の移動範囲の中に入っているので家畜が岩穴に挟まれたりすることが良くある。
- 18) 畝(せ、ほ)のこと。土地の面積の単位である。中国では1ムが約667平方メートルとなる。
- 19) 『シリングル日報』第4期、2011年5月、2頁。

参考文献

(日本語文献)

- 阿拉坦雅図・掘口孝春ほか「内モンゴルの自然災害と救援活動—内モンゴル日報社および内蒙古电视台の取材資料調査より」『室蘭工業大学紀要』2005年11月 pp51～59。
- 安部治平「内モンゴルにおける牧畜家族経営の成立過程」『中国研究月報』(484) 1988年6月 pp1～8。
- 伊藤操子・赦敏ほか「内モンゴル草原の現状と課題」『雑草研究』51(4) 2006年12月 pp256～262。
- 王晓毅『環境圧力下の草原社区—内蒙古六個嘎查村的調査』社会学文献出版社 2009年8月。
- 奥倫・斉籐郁雄ほか「ランドサットデータによる内モンゴル半乾燥地帯における土地被覆変化の解析」『日本建築学会環境系論文集』2005年5月 pp83-88。
- 尾崎孝宏「内モンゴル牧民に関する遊牧論的比較考察」『鹿大史学』第50号 2003年1月 pp11～31。
- 川村健介・秋山侃ほか「草原生態系の保全と持続的利用にむけて—衛星モニタリングとGPS/GIS—」『日本生態学会誌』55(2) 2005年 pp327～335。
- 環境経済・政策学会『アジアの環境問題』東洋経済新報社 1998年9月。
- 呉金虎『中国内モンゴル区における農業生産力の立地に関する要因分析:2000年の旗レベルにおける横断分析』『龍谷大学経済学論集』2004年10月 pp1～19。
- 「中国内モンゴル区における所得水準の要因分析:2000年の3級行政レベル(旗)における横断分析」『龍谷大学経済学論集』2006年3月 pp21～48。
- 川崎高志「内モンゴルにおける貧困対策と世界銀行プロジェクトの実施状況:内モンゴル自治区を中心として」『創大中国論集』2006年3月 pp99～109。
- 巖網林『国際環境協力の新しいパラダイム:中国の砂漠化対策における総合政策学の実践』慶應義塾大学出版社 2008年4月。
- 黒崎未侑・今井範子ほか「5034中国・内モンゴル自治区草原地域におけるモンゴル民族の生活様態と居住空間の変化:シリング盟の移民村・都市近郊における遊牧民の事例調査から(伝統的住居の変化とライフスタイル, 建築計画I)」『学術講演梗概集』E-1, 建築計画I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2007, 2007年7月 pp67～68。
- 小長谷有紀『中国の環境政策生態移民:緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるのか?』昭和堂 2005年5月。
- 三秋尚「モンゴルー遊牧の生産・生活技術」『牧畜の研究』第19号 1996年。
- シンプソン・李鷗ほか「中国内モンゴル自治区北東の二種類の定住畜産経営に関する比較分析(研究課題:中国西部放牧地域における貧困軽減のための参加型地域開発に関する研究、I 共同研究)」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第8号 2006年5月 pp249～272。
- 賽西雅拉図・酒井 啓ほか「中国・内モンゴルのアバガーホシュー草原における飼育家畜の密度と草原荒廃の関係」『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ』Ⅱ58, 2007年 pp21～35。
- 水谷令子・富田寿代ほか「中国内モンゴル自治区の生活環境調査」『鈴鹿国際大学紀要』第12号 2005年12月 pp231-242。

- ソロンガ「内モンゴル自治区における民族教育の現状—都市部のモンゴル家族の生活実態を中心に—」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第7号 2006年3月 pp205-234。
- チョイラルジャブ ボルジギン・フスレ『内モンゴル西部地域民間土地・寺院関係資料集』第一集 風響社 2011年5月。
- 張承志・梅村坦『モンゴル大草原遊牧誌：内モンゴル自治区で暮らした四年』朝日新聞社、1986年4月 p5。
- 野沢延行『モンゴルの馬と遊牧民：大草原の生活誌』原書房 1991年7月 p4。
- 野村理恵 中山 徹「中国内モンゴル自治区草原地域における正月行事と居住空間」『日本建築学会近畿支部研究報告集計画系』第47巻 2007年5月 pp373～376。
- フスレ ボルジギン「内モンゴルにおける土地政策の変化遷について(1946～49年)：土地改革の展開を中心に」『学苑』791、2006年9月 ppA24～A43頁。
- フフバートル『私が牧童だったころ：モンゴル人が語るモンゴルの世界』東京 インターブックス 2001年1月 p35。
- バト「内モンゴルにおける牧畜営業と耕種農業」『横浜国際社会科学研究所』11(3)、2006年 p13。
- モンゴル研究所(編)『近代内モンゴル東部の変容』雄山閣 2007年3月 p18。
- 山口有次 齋藤隆夫「内モンゴル正藍旗の観光施設開発と環境・景観保全に関する調査」『桜美林論考』ビジネスマネジメントレビュー 2、2011年3月 pp79～94。
- 吉田順一「モンゴル研究の過去と将来」『北東アジア研究』第7号 2004年3月 pp15-24。
- 「モンゴル研究の過去と将来(特集)モンゴル学国際シンポジウム」『北東アジア研究』第7号 2004年3月 pp15～24。
- 「興安嶺南山地の経済構造：ハラトクチンの経済の分析を手掛かりに(特集)モンゴル語国際シンポジウム」『北東アジア研究』第7号 2004年3月 pp25～41。
- 楊海英 児玉香菜子「中国・少数民族地域の統計をよむ—内モンゴル自治区オルドス地域を中心に—」『静岡大学人文学部人文学科研究報告』54(1) 2003年7月 ppA59-A184。
- リンチン「内モンゴル牧畜業における三面紅旗政策に関する考察」『中国研究月報』2008年2月 pp20～39。
- 楊海英『蒙古源流：内モンゴル自治区オルドス市档案館所蔵の二種類の写本』風響社、2007年11月 p13。
- 和光大学モンゴル学術調査団著「変化するモンゴル世界：国境にまたがる民」『大学紀要』1999年1月 pp217～221。
- 和田正信『内モンゴルの草原日記』連合出版 1999年7月 p6。

(中国語文献)

魏建昆・王海波主編『北方半乾燥地域の持続農業研究』中国農業科学技術出版社 1997年 p10。

広川佑保 蒙地奉上:「満州国」の土地政策』汲古書院 2005年12月 p25。

中国農業大学編『草地学』2004年 p16。

閻華「完善牧業責任制的幾個問題」『实践』1984年第4期 1984年3月。

徳格吉夫(ドグジフ)「談『牲畜帰戸、草場承包、定額提留』」『实践』1984年第12期。

白俊郷「深入進行牧区改革、發展牧区商品經濟」『内蒙古日報』1985年2月 p18。

白慶和「“牲畜作价帰戸”好」『实践』1984年第10期 1984年6月 p27。

内蒙古通志編纂委員会『内蒙古通志』呼和浩特 内蒙古人民出版社 2007年8月 p34。